



# 宇佐美 毅 教授

Takeshi Usami

## フィクションの力を信じて

村上春樹の「読み方」を多くの人に提示

近現代の日本文学を専門とする宇佐美先生は、現在、主に二つのテーマに力を入れている。一つは、村上春樹作品をはじめとする現代の日本文学作品の中に過去の作品の影響を見出し、小説史の中に位置付けていく研究。

もう一つは、小説はもちろんテレビドラマなどの作品を通じて「人はなぜフィクションを必要とするのか」を考察する研究だ。どちらも私たちにとって親しみやすいテーマであり、

事実、先生がテレビや雑誌のインタビュー、そして講演などを通じて一般の方々に意見を届ける機会は多々ある。

中でも依頼の多いテーマが「村上春樹」とのこと。今や日本を代表する作家である村上春樹だが、その作品世界の研究は意外に進んでいない、と先生は語る。

「村上春樹の作品には『空白』が多い、という特徴があります。ストーリーをどう解釈するかが読み手に委ねられる。だから、読み手は自分が作品から何を感じたかを語りたくなるんですね。村上春樹を取り上げた

本はたくさんあるけれど、彼の作品を『どのように読み、どう評価したらいいか』を提示するものはあまりない。僕は研究者として、自分がどう感じたのかを語るのではなく、村上作品を分析し、どのように意味付ければいいのかを一般の読者に提示していきたいと思っています」

### 小説とは、「仕掛け」の複合体

先生によると、「何を求めるのか」によって村上春樹作品の読み方はいくつもあるという。例えば、洒落た世界観を堪能する。あるいは、作品が提示する謎に自分なりの答えを探っていく。または、「謎は必ずしも解かれなくてもいい」という癒しを見出す……。

「いくつもの解釈ができて、自分が望む読み方ができる。それが、村上作品が多くの読者を引きつける理由の一つだと思います」こうした話に、読まれる理由がわかった、という反応も多いそうだ。「けれど、村上春樹の研究を始めるまでは、インタビューや講演の依頼なんてまったくなかったんですよ」と先生は笑う。

もともと先生は、明治期以降の小説の表現について研究していた。「文明開化以降、日本の小説がどのよう

に変化していったか、ということに研究していたんです」小説は、無数の仕掛けの積み重ねでできている。私たちは現実的には自分の気持ちしか、時にはそれさえもつかめないが、ひとたび小説の世界を訪れると、いくつもの仕掛けによって、主人公はもちろん多くの人間の心の中を知ることができる。先生は小説ならではの登場人物の心の見せ方を追究し、時代時代の表現の変化を見つめてきた。そして、多くの作品が影響し合っていること、その関係性の中に「小説表現の変遷」がたどれることを明らかにしてきたのだ。

### タテのつながり・ヨコのつながりで小説を読み解く

村上春樹作品についても日本文学の影響を見ることができると先生は語る。「村上春樹は長い間、日本的ではない」とされてきましたが、その作品や発言をたどっていくと、『雨月物語』で知られる上田秋成や、夏目漱石の初期作品など、日本文学の影響も強く受けていて、作品の中に過去から脈々と受け継がれてきた日本文学の表現が息づいている。こうした発見をすることが、この研究の面白さです」

村上作品の中に日本文学の「タテ

のつながり」を読み取れるように、人気作家・よしもとばななや江國香織の作品には、現代という「ヨコのつながり」を見出せる、と先生は続ける。「彼女たちには、理由のわからない死や、誰かの死後の日常を描く作品が多い、という共通点があります」本来、死はとても深刻なテーマだ。文学では長らく、死を取り上げる際にはそこに至る理由をしっかりと描かなければならない、という暗黙の了解があった。しかし、年間3万人以上の人が死を選び自殺が珍しいものではなくなった時代の中で、一つひとつの死を深刻に受け止め過

ぎていては自分たちは生きていけない、という風潮が生まれてきたのではないかと、先生は話す。それでも自分たちは生きていかなければならない、死について考え過ぎても仕方がない、という感覚を、現代で支持される作家たちは持っているのではないかと、先生は考えている。

「文学作品を歴史という、タテのつながり、時代という、ヨコのつながり、から考察していくと、作品同士の思わぬ共通点や、その作品だけが持つ特徴が浮かび上がってくる。それをとらえることが、文学研究の醍醐味の一つですね」

### 人はなぜフィクションを求めるのか

そして今、先生は研究対象を小説からテレビドラマなどフィクション作品全般に広げ、「人はなぜフィクションを必要とするのか」という命題に取り組んでいる。「現代ほど、他者への想像力を働かせなければならぬ時代はありません」と先生は語る。むかしは、例えば男性は男性、武士は武士であれば良かった。けれど、ライフスタイルが多様化した現代では、自分とは異なる性や障がい者、外国人など、さまざまな存在の気持ちを思いやって行動すること



宇佐美先生の著書・共著

# Close up

クローズアップ



## ■ 宇佐美 毅 (うさみ たけし) プロフィール

1958年2月26日、東京都生まれ。1976年、宮城県仙台第一高等学校卒業。1980年、東京学芸大学教育学部卒業。1985年、東京大学大学院修士課程修了。1990年、東京大学大学院博士課程単位取得退学。中央大学文学部専任講師、同助教授を経て現職。



現在はスポーツ観戦が趣味。写真は2006年ドイツで開催された、サッカー・ワールドカップの会場にて

## ■ 現在の研究テーマ

- ・ 村上春樹をはじめとする現代文学の小説史的研究
- ・ フィクションとしての小説研究
- ・ テレビドラマ研究

## ■ 高校生の頃の将来の夢は?

「夢」という、曖昧なビジョンはありませんでした。子どもの頃はスポーツ選手に憧れていましたが、高校に入学して勉強・スポーツともに現実を知り、堅実に将来を考えなければならぬ……と思っていました。

## ■ どんな高校生でしたか?

5種競技の選手として陸上競技部に所属。県大会で準優勝するところまで行きましたが、ケガによる故障もあり、スポーツの世界で身を立てることを断念しました。一方、高校に入学するまで読書の習慣がなかったのですが、友人の影響で図書館に通い始め、小説の世界を味わう楽しさを覚えるようになりました。

## ■ お勧めの本を3冊あげてください。

- ・ 『謎とき村上春樹』石原千秋 (光文社新書)
  - ・ 『イメージを読む』若桑みどり (ちくま学芸文庫)
- この2冊は、「フィクションを読む」ということを教えてください。
- ・ 『なぜ人を殺してはいけないのか』小浜逸郎 (洋泉社新書)
- 現代の日本人が、「倫理」とどう向き合うのかについて考えさせられる本。10代後半という年頃の皆さんに見つけてほしいテーマです。

## ■ 大切な1冊

僕には、1冊の本との出会いで人生が変わったという体験はありません。けれど研究者として歩む際に、三好行雄さん、前田愛さんなど多くの先達から影響を受けました。

## ■ 高校生へのメッセージ

自分の「個性」と思っているものを一度疑ってみてください。「〇〇が好き」という気持ちも、自分の中でしっかりと練ったものですか? 研究の世界では、鍛え抜かれたものには「個性」という言葉を使いません。ただの好き嫌いを「個性」とは呼ばないのですよ。



宇佐美先生のおすすめの本

## 「3・11以後」におけるフィクションの存在意義

私たちは2011年3月11日、東日本大震災に遭遇した。ニュースの画面に、映画を見ているような感覚を抱いた人も少なくはないだろう。現実がフィクションを超えるシーンを目の当たりにした今、フィクションの存在意義とは何か、先生に伺った。

村上春樹がこんなことを言っています、と先生は答える。「現在の私たちにソリッドな地面がない、足元を支えてくれるしっかりとした基盤がない、と」ずっと続々と続いていた日常がたった二つの、しかし大きな出来事で揺らぐと、私たちはとても混乱し、何を信じたらいいのかわからなくなる。だから、現実は一つではない、自分たちの世界は時に揺らぐものと提示する、それがフィクションの存在意義だと考えています、と先生は言い、続けた。「一方で、フィクションは私たちに力を与えてくれるとも、私は信じています。フィクションを味わうことで培ったイメージは、困難な事態に遭遇した私たちを支える力となってくれるでしょう」数え切れないほどのフィクション作品に向き合った先生の言葉には、行き先を迷う私たちの背中を押してくれるような、確かな力と温かさが感じられた。

が欠かせなくなっている。そのため想像力を養い、鍛えるために、最も優れたツールがフィクションだと、先生は考えている。

では、なぜ人はフィクションを求めるのか。「お金や食べ物など、物質的なものだけでは人は生きていけない。時に、別の人生を体験する楽しさや自分ではない存在に共感する喜びを味わい、人生を豊かにふくらませるために、人はフィクションを必要とするのではないか、というのが現時点での答えです。けれど、このテーマについては今後も追究を続け、さらに深めていきたいですね」

## 「テレビドラマ研究」という新たな分野に挑戦

そして、これから先生が本格的に取りかかろうとしている分野がテレビドラマ研究だ。「そんな身近なものが研究テーマになるの?」と感じる人は多いだろう。事実、テレビドラマは通俗的なもの、というイメージが一般的にあり、映画や演劇と比べテレビドラマを学術的に追究する研究者も少ない。しかし先生には、研究を進めることでテレビドラマへの偏見を打ち破りたい、という思いがある。

「通俗的かどうかは時代に左右されます。人気子役・芦田愛菜さんの出世作となった『Mother』のように、児童虐待など深いテーマを扱い、支持される作品も増えている。そろそろテレビドラマをきちんとした批評や研究の対象として取り上げるべきだと、僕は考えます」他の媒体にはないテレビドラマの長所は、圧倒的に長い時間を使って物語を構築するため人物像を細やかに描けること、と先生は続けた。「映画が短編小説だとすれば、テレビドラマは長編小説。その優れた点を、もっと多くの人に知ってもらいたいですね」

## 受講するからには理解してほしい、楽しんでほしい

先生のお話には、読書好き・フィクション好きならぐんぐん引き込まれるような引力がある。実際の授業はどのように行われるのだろうか。

「一番大切にしているのは学生とのコミュニケーション」と言う先生の本気度は、半端なものではない。受講生が100人以上いる授業では毎回コメントシートを配布して回収、学生の意見を丹念にチェックしている。「このポイントが難しかった」といった声があれば、次の授業でよりわかりやすく解説する。「受講するから

には理解してほしい、楽しんでほしい」という先生の思いがそこに表れている。そして基礎演習やゼミなど少人数の授業では、先生は発表や質疑応答を通じて学生に発言を求め、さらにメールでも学生の声を聞く。学生の顔写真を持参して授業に臨み、発言した者をチェックするという徹底ぶりである。意見なんて何を言ったらいいのかわからない、という学生は僕の授業が苦手なんです、と先生は笑う。しかし、学生一人ひとりの「声」を大切に先生は、生徒心に残る、有意義な学びの時間を持つことができるのではないだろうか。



先生のゼミに所属する学生と、研究の報告集。楽しい雰囲気伝わってくる

